

# 子どもの描画表現活動のあり方と関わり方

山 本 秀 行

How to draw and engage children's drawing activities

Hideyuki Yamamoto

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

## 子どもの描画表現活動のあり方と関わり方

How to draw and engage children's drawing activities

山 本 秀 行

Hideyuki Yamamoto

### は じ め に

動き回る本物の動物を見たり、目の前の小動物に触れ合ったりすることで、子どもたちは個々の創作意欲が掻き立てられ、普段より真剣に画用紙に向かうようになる。私の教える小学生たちが動物園の写生会に参加する時の様子である。

ところが、この子どもたちの保護者である大人たちの考え方、子どもへの対し方がよくない場合が多い。親なら誰しもが少なからず抱く親心であろうが、これがあまりにも一方的であることが常である。

シマウマならシマウマらしく、ペンギンならペンギンらしく描かせたい。いわゆる絵心のある親や大人ほど、自分ならこう描くという大人目線の形にさせたがる。

うちの子だけは、他の子どもよりも少しでも上手に描かせたい。大人が見て上手だなと言わせる絵に仕上げさせたいという「見栄」。

せっかく絵画コンクールに出品するのだから是非入選させたい。できることならなるべく良い賞を受賞させてやりたいという「欲」。

非日常の自然を見て感じたまま、思いのままに創作表現し、造形活動そのものを楽しませるのが第一の目的であるはずの機会。

その機会に大人たちは子どもたちに、もっとよく見て描くように、もっと本物に似せて描くようにと、この「見栄」と「欲」を容赦なくぶつける。もちろん、これは子どものためになることだと信じての助言なのだろうが、子どもの思いを受け入れず、知らず知らずのうちに横槍を入れ、折角湧き出た意欲に水をさすことになるのだ。

小学生にもなったのだから、この位のことは要求してもいいのではと保護者たちは反論するかもしれない。しかし、もっと以前、初めて子どもが絵に出会った幼少期から、多くの大人たちは一方的な親心を子どもに押し付けているものである。「子どもなりの絵」には理解を示そうとはせず、大人の視線で上手、下手と判断する。一步間違えてしまうと、その行為は子どもの伸びやかな思考を萎縮させてしまう原因の一つになりかねない。

厚生労働省発行の「保育所保育指針」<sup>1)</sup>の「表現」の領域にはこう記載されている。

「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」

さらにその「ねらい」では「いろいろな物の美しさなどに対する豊かな感性を持つ。」「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。」と繰り返している。

子どもが絵という形で創作する表現活動が人間形成にどう関わり、成長の過程においてどれほど重要な役割を果たしているのか。「自分なりに」表現させるために大人たちのやるべきことは何なのか。主に幼児期の発達段階に沿って考察する。

## 1. 人は絵を描く生き物である

遠い昔、地上で生活していた人類の祖先は、敵の襲撃を避けるために樹上生活をするようになった。アフリカの乾燥化により森林が縮小しサバンナが拡大したことで、樹上生活から平地へと生活環境を変えた人類は、それまで足として使っていた現在の手を歩行の用途から解放し、独立した動作を可能とした。手指の動きは脳を刺激し、刺激された脳はより発達し、自然の形状のままで使用していた道具に改良を加え、使いやすい、便利な道具へと加工する知恵がついていった。試行錯誤を繰り返し、新たな道具を次々に生み出していく。道具の改良、加工の始まりこそが、「創造」のはじまりといっても過言ではない。

創造を身につけた人は、自分の気持ちや考えを「表現」することが可能になった。表現は内的なことがらを外的にするだけでなく、物事や他人の考えなどの伝達をも可能にした。言葉や

文字をまだ持たない時代においては、絵画などの造形表現がこれら内的な心の表現や伝達をするにあたり、最も有効な手段の一つであったことはまちがいない。

一見壮大すぎる人類の発達の話だが、一人の子どもがことばを身につけていない幼少期に置き換えても、「絵を描く」行為がその成長過程において非常に大きな役割を果たしているのは言うまでもない。

アメリカのビクター・ローエンフェルドの研究では、子供の成長に伴い絵も段階を追って変化し、その段階・パターンには共通点がある、と記されている。ここからは各段階とパターンにフォーカスを当て、分析してみる。

## 2. 子どもの成長段階

### 2-1. 身体運動としての絵

生まれたばかりの乳児が乳を飲む「口」から始まる「運動」は、口から手へ、そして足へと発達していく。握っていた手を開き、その手をなめ、物をつかんで口に持っていく。「手指は突き出た脳である」と言われるように、口や手の運動による刺激が子どもの脳に与える影響は大きく、生活の中で手指を使い経験することはとても大切である<sup>2)</sup>。

そして、生まれて初めて周囲の人の目に届く表現活動である「絵を描く」という行為は、この手指を使う経験を大きく加速する。

幼児と呼ばれるようになった子どもは、牛乳の入ったコップを倒してしまったり、クレヨンや鉛筆を紙や床、壁にこすりつけたり、自分の身体の動きが痕跡として見えることに興味を持つようになる。もちろん本人には絵を描いてい

るという自覚はない。さらに画用紙とクレヨンや絵の具などの画材を与えると、手をいっぱいに動かし、画用紙に向かって格闘するかの如くアクションをかけ、「動き」とその「結果」を楽しみ、満足した表情を示す。

絵を描くことはここから始まるが、この時期の子どもは、「絵を描こう」、「気持ち表現しよう」、「何かを伝えよう」などと考えながら行動しているわけではない。「おもしろい」と感じる好奇心が原動力となり、行為に及んでいるのである。

この行為はまだ表現と呼べるようなものではなく、材料体験の面白さが進んでぐしゃぐしゃ描きを盛んにするようになっているのである。しかし、絵画というのはそもそも見る人がいないと成立しないものだが、楽しさを「表現」しているという点で、子どもの絵の出発点であるとも言えるだろう。

## 2-2. 動きを楽しむ「なぐり描き」

「おもしろい」という欲求に従っているうちに、視ているものと自分の身体の動きとの関係を知るようになるが、はじめはこの動作は全く統制されているものではなく、ただそれを喜んでいるだけである。

しかし、この単純に見える「ぐしゃぐしゃ描き」や「なぐり描き」は、物に作用し、その物と自分との関係を知り、目と手の運動を一致させるものであり、子どもは肉体的にも快い満足感を得ているのである。近くにいる大人に「描いたよ」とアイコンタクトをし笑顔を見せたりする。この瞬間から、子どもにとって「絵を描く」ことが楽しい遊びの一つとなり、さらに多

くの線や点を描き始める。

この過程があつて、いずれものの形が生まれるようになるため、「なぐり描き」だからといって、形らしいものを描かせようとしたり、無理強いしたりしてはならない。

たとえば、なぐり描きをする3歳の子どもは、紙の上になぐり描きの動作をしている時は全く幸福である。ところが大人は、子どもがなぐり描きを練習して、自由な動作を覚えなければいけないということを知らずに、「何を描いているの？」と尋ねたりする。子どもは、何も連想などせず、ただなぐり描きによって思うままに動作ができるという喜びしか感じていないので、この質問の意味がわからず、何の反応も示さない。好奇心の強い大人は、なぐり描きの意味や価値を知らないままに、ただよかれと思い、「リングを描いているんじゃない？」とかぶせてくる。このくらいの子どもは、絵の内容については何も考えていないということを知らないのだ。子どもは何を言われているのかわからず、大人の顔を見守るだろう。子どもにとってのリングは、食べたり、手に持ったりするもので、絵に描くものではない。リングの絵を描くなど、まだ想像すらつかない。それでも好奇心から「描いて」と頼んでくる子どももいるだろう。その時、子どもの役に立ってやりたいと考えた大人がリングを描いてやると、子どもはその大人を喜ばせたいと思い、なぐり描きをするのをやめて、リングの絵を真似し始めるだろう。子どもには線で描かれた絵などとても本当のリングとは思えず、ただ何か丸のようなものがあるのか思えないはずである。その後は大人がその子どものそばに行くと、一面に小さい丸が描かれ

た紙を見せ、それを理解できない大人の「それは何？」という質問に対し、得意気に「リンゴ」と答えてしまう<sup>3)</sup>。

「ため」を思っただけの行為が、自分自身を表現したいという子どもの要求を妨げてしまったわけである。大人は、子どもがなぐり描きをしている時は、どんなに夢中になっているのかを見ていけばいいのである。なぐり描きは、子どもの成長過程にあつてとても重要である。大人はそれを邪魔したり、やめさせたりしてはいけない。自分を解放するこのような重要な方法を子どもから奪ってはいけないのである。

子どもはなぐり描きを始めて数ヶ月もすると、好きなように手を動かすとその通りに紙に何かを描けることを発見し、さらに自分が動作をコントロールできることを発見する。子どもは満足し、同じことを何度も繰り返すようになり、そのうちに自信がついてくる。これが最初の造形表現の経験である。

小学生以上になった時、絵を描くことが好きになっている子どもは、この時期にぐしゃぐしゃ描きやなぐり描きを十分に体験し、楽しみ、満足し、自信がついた子どもなのである。

### 2-3. 対話を楽しむ絵

なぐり描きをしている間は、子どもは自分以外のことは何も考えていないが、そのうちにその意識が変化し、自分以外の何かを考えるようになる。心の絵、イメージによって考えるようになるのである。絵と対話を始め、毛糸の絡まったような線やぐるぐると丸く塗りつぶした固まりを描くようになる。話や自己主張もできるようになった子どもは、このぐるぐる丸を指差

して、「おかあさん」「ぱん」「かえる」などと具体的な物に見立てて話しながら描くようになる。このような動作主体で考えることから絵を主体に考える変化はとても重要である。なぜなら、この先の人生において、本人の考えのほとんどはイメージに関連しているからである。私たちは、過去に出会った人の顔や、過去の経験を思い出す時、心に絵を思い描かないことはほとんどない。

しかしながらこの時期は最も自己中心的な時期で、最初に描いた「ぱん」が、後で聞くと「いちご」だったり「おいも」だったり、さらに同じ物が「お母さん」だったり、都度命名が変化する。描いた後から命名する「見立てる」活動である。

大人の眼にはとてもそれに見えるような形ではないのだが、子どもにとってのそれは自分が視覚・聴覚から取り込んだ経験の中から偶発的に頭に浮かんだものや、言葉を象徴的に表す記号のようなものである。「いつもぐるぐる丸ばかりで進歩がない」「丸は描くが、目や口は描かないのか」絵を表面的な形で判断していると、子どもの絵に表現された本当の内容と発達段階を見逃してしまうことになるため、大人目線の判断は控えなければならない。

子どもは次第にイメージした物を丸で描くことが常態化し、ついには丸の最初と最後が閉じる瞬間に出会う。丸が閉じるということは、それまでの偶然描いたぐるぐる丸に後から命名する「見立て活動」から、自分のイメージが手の動きを先行する「つもり活動」になったということである<sup>2)</sup>。

この頃から、子どもの絵を描くという行為に

「表現する」という意味が含まれるようになる。今までは運動によって起こる現象の延長として楽しんでいてのが、次第に「絵を描く」ことで物を「表現」する行為を楽しむようになり、自分の描いたものを他のものと結びつけることで子どもは絵と対話を繰り返すのである。

さらに言葉は進み、「かえるをつかまえた」「ばなをたべた」「おかあさんとてをつないだ」など動詞を入れた多語文で盛んに話をするようになり、生活体験を絵で表すようになる。閉じられた丸の中には目や口が現れ、「顔」から「頭足人」へと変化していく。単に顔の形をたくさん描くのではなく、周囲の人との楽しかった気持ちや行為を伝えるための絵を描き始める<sup>2)</sup>。

#### 2-4. 意欲や言葉が溢れる絵

知的欲求が目立つこの時期は、記憶力、思考力も発達し、自分の知識や体験を表現しようと、色々と描けるようになる。単純な線により説明的に表現される形は、説明されなくても大人にも十分に理解できるようになる。ただ、この時期の絵の特徴は、描かれたもの同士に大小関係、因果関係などがなく、太陽を描いた横にメロン、その横に人の顔、カブトムシと、脈絡なく並べられる。あたかもカタログに商品が並んだように描かれるため、カタログ期と呼ばれる。

これまでは断片的な記憶から絵と結びつけるだけであったのが、発想や連想を覚えることによりさらに記憶力を高めるこの時期は、次から次へと意欲や言葉が溢れ出し、またそれを受け止める器を育む段階であるとも言える。

「たくさん描いているけど、ばらばらだ」「太陽は上の方がいいのではないか」この時期は絵

を描く意欲もさることながら、言葉も豊富になっている時である。物の大小を比較したり、形や順序の指摘をしたりすることなく、より多くの話をさせたり、都度相槌を打つなどして、とにかく次から次へと羅列的にたくさん描かせることが重要である。言葉が先か、絵が先か。内にある記憶と感情が次々と溢れてくる状況を受け止めてやりたい。

また、この段階は色彩に対して興味を示す時期でもある。使用する色は必ずしも物の固有色ではなく、感情や情緒が先行した色が使われたりする。その時、その色を選ばなければならない心や体の様子を理解し、必然性があると捉える必要がある。使っている色が間違えているとか、「木の色はみどりだ」「リンゴの色は赤色だ」などと一方的に告げたり、ましてや勧める色のクレヨンを手渡すような行為は決して行っていない。

#### 2-5. 見たもの、知識を絵にする

子どもは知的、情緒的な成長に伴い、自分を取り巻く周囲の関係や状況を知るようになってくる。

たとえば顔からいきなり大きい足が突き出た絵を描き上げた時、「お父さんは顔があって、2本の足がある」だから、「この絵はお父さん」と声を上げる。いつも会話する時に見る父の顔と、隣に並んだ時に見える大きい足にインパクトを覚え、「リアル」な繋がりを実際に作ろうとする。少なくとも子どもにとっては、それは我々大人のリアルな繋がりと同じくらい「リアル」な繋がりのなのである。もちろん本人は父に手も体もあることは知っている。それでも描いているう

ちに父の顔と足のことを一番強く思い出したのだ。描いている時に父は長い足を持っているということを、父の一番重要な特徴として思い出したのだ<sup>3)</sup>。

この時期の子どもは、人とはこんなもの、家とはこんなもの、自動車とはこんなもの、というように一つ一つの事物について確かな認識を持ち、それぞれの概念も形成されていく。特徴的なことは、例えば家、木、太陽、山、花などに見られる記号的（図式的）な要素がどの子どもにもほぼ共通していることである。画面には上下左右ができ、大小のバランスや物と物との関係づけができてくる。色についても物の固有色を使う傾向が出てくる。

しかし、対象とする物と絵にリアルな繋がりを打ち立てることができるのに気付いたばかりの時期なので、絵に秩序を打ち立てることはまだできない。対象物をただ思いつくままに描くのである。秩序はないが、この時期の子どもの絵には大きな特徴がある。それは『ベースライン』と呼ばれるもので、地面との境界に一本の線が引かれる。そして家、木、花、人物、動物などはすべてこのベースラインの上に並ぶ。空は上にあり、空の境界にも線が引かれることもある。地面は常に下にあり、ベースラインが画面の下方ぎりぎりに引かれることが多い。地面と空の間はいわゆる『空気』であって、そこには何も存在しない。これがこの時期の子どもの空間認識なのだ。

たとえば、動物園に行ってきたこの時期の子どもが自宅で動物の絵を描くとする。紙にベースラインを引くや否や、特別な印象を描くことなく、思いつく物を次々に描き始める。「ぼくは

動物園にいる。ここにぼくがいる。ここにはキリンがいる。象がいる。檻がある。」それぞれの動物や建造物はばらばらで、絵の中で特別な繋がりを持っていない。空間的な繋がりも考えない。しかし、この子どもにとっては「動物園と自分の絵」というもう一つの繋がりがはっきりと打ち立てられているのである。「あなたとキリンの間には柵があったでしょ」などと自分の絵と外界との間に繋がりを作ることができたという重要な発見をした時に、子どもの思いや注意を空間の繋がりに向けさせて邪魔すると、ただ混乱し、自分の発見に自身を失うだけである<sup>3)</sup>。ここでも大人目線の助言や批評は、子どもの発達を邪魔するだけのものに過ぎないのである。

## 2-6. 大人らしい絵

やがて子どもは記憶を描くのでなく、見た物を描くようになる。手前の物と奥の物といった遠近の重なりが画面に表現され始める。空は徐々に下に広がり、地面は遠くを上へ上へと描くようになる。やがて空という空間と地面という空間が繋がり、地平線や水平線が表れるようになる。「すぐできる簡単なことより、やっと届く難しいことが好き」ということを感覚的に知るこの時期に入ると、より「絵」としての完成度が上がり、立体的な表現が可能になってくる。「写実」することに興味を持つようになり、見た通りに描くことができることを楽しみ始める。いわゆる「絵のうまさ」もこのころから差が始める。

大人らしい絵として完成に近づくこの時期になって、初めて大人が言う「普通の絵」を描いてほしいという願いを伝えられるのだが、子ど

もは大人の都合で絵を描いているわけではないことを肝に命じる必要がある。いわゆる「もの分かりの良い」子どもほど、簡単に大人の意見や願いを受け入れてしまう。やがて大人の顔色を伺って絵を描くようになり、自分の表現ができない「ただの」上手な絵を描くだけの子どもになってしまうことだけは避けなければならない。

### 3. 子どもの絵は「ことば」である

スーパーマーケットで小学生連れの母親が2組、偶然出会い挨拶を交わすシーンをよく目にする。その際、母親Aさんがもう一方のBさんの子どもの優秀な面を褒め称える。「この間の発表会は立派だった。」それに対しBさんは懸命に否定する。「いやいや、うちの子なんてまだまだ。」がんばっても報われない。褒め言葉をも否定する。横に立つBさんの子どもの気持ちはいかなるものか。このような会話を実際に体感した保護者も多いのではないだろうか。

同様に、保護者から子どもの絵について、「Aちゃんは上手だけど、うちの子は下手」という言葉をよく耳にするが、その都度心が痛む。人と比べられ、下手のレッテルを貼られる。乳児の絵、幼児の絵、小学生の絵、全ての年齢の絵の価値は同じである。その子どもの「今できる精一杯の表現」に甲乙をつけるべきではない。そこに寂しかったり痛々しかったりする表現があったなら、自分への接し方や関わり方を変えてほしいというメッセージかもしれない、大人が反省すべきである<sup>2)</sup>。

幼児の絵は「ことば」だ。ぐしゃぐしゃ描きに始まり、最初は動きや結果そのものを楽しん

でいた子どもは、身体の成長に並行して成長していく感情の表現手段として絵を用いるようになるのである。

乳児期に突然大きい声を発して「音」を楽しんでいた子どもが、徐々に自分の「声」を知るようになり、知識と体験から「言葉」を使い始める。それと同様に絵も自分の内的感情を外的に表現する大切な「ことば」なのである。

また、別の視点で評価をすると、絵は「言葉」に勝る要素を持っているとも考えられる。

日本語を自分の考えが伝わるレベルまで習得すれば、1億人に伝えることが可能であるが、絵を自分の考えが伝わるレベルまで習得すれば、60億人に伝えることが可能である。絵は言葉よりも先に生まれたコミュニケーションを図る媒体であり、世界中ほとんどの人たちと意思疎通を図ることのできる、非常に優れた能力となりうる。

### おわりに

子どもは描き始める時、「何か」を考えているに違いない。この「何か」は、我々にはくぐらないと思われることがよくある。しかし、子どもにとって、それは自分自身および自分の経験に直面することである。子どもがそれを考える時、子どもの頭は描こうとする経験に集中する。子どもの思考力や注意力を集中する能力が刺激を受けるわけで、創造活動の重要な第一段階である。

たいていの子どもは、大人さえ束縛しなければ、のびのびと創造的に、自分自身を表現する。大人の態度や家庭の雰囲気や子どもの造形表現にもたらす最大の貢献は、子どもの自然の成長

を妨げないということである。そして、そんな雰囲気の中、描画活動によって伝え合う喜びを知って育った子どもに「絵嫌い」はいない。子どもたちはイメージを一杯に膨らませて、絵によって表現することが「歌を歌うように、砂場で遊ぶように」当たり前のことになっているからだ。

這うことがまだできない乳児を、歩行器に入れて一人で移動する遊びをさせたとする。その子は這う努力をせずに歩き始めたりする。しかし、よく転んだり、転んだ時に手をつかずに顔に怪我をする、足腰の弱さやバランスの悪さなど発達の歪みが出てしまうに違いない。歩行を始める前段階では這う行為が大切であるように、描画活動でも、身体的にも精神的にも年齢に応じた大切な発達段階がある。子どもの発達を無理やり縦に引き上げるのではなく、横に広げて次の発達段階の基礎を作る必要がある<sup>2)</sup>。そのためには、子どもを取り囲む大人が、子どもの生活体験を多様で豊かなものとし、その年齢からできる発達の過程を大切にすることが重要である。

最後に、大人に対する子ども側を表した、サン・テグジュペリ作「星の王子さま」<sup>4)</sup>の冒頭の一節を紹介する。

(作者が描いたウワバミの腹の中で消化されこなれるゾウの絵をめぐって)

ぼくは、鼻たかだかと、その絵をおとなの人たちに見せて、〈これ、こわくない?〉とききました。

すると、おとなの人たちは〈ぼうしが、なんでこわいものか〉といいました。

ぼくのかいたのは、ぼうしではありません。

ゾウをこなしているウワバミの絵でした。おとなの人たちに、そういわれて、こんどは、これなら、なるほどとわかってくれるだろう、と思って、ウワバミのなかみをかいてみました。おとなの人ってものは、よくわけを話してやらないと、わからないのです。ぼくの第二号の絵は、下のようなのでした。(絵略)

すると、おとなの人たちは、外がわをかこうと、内がわをかこうと、ウワバミの絵なんかはやめにして、地理と歴史と算数と文法に精をだしなさい、といいました。ぼくが、六つのときに、絵かきになることを思いきったのは、そういうわけからでした。ほんとに、すばらしい仕事ですけど、それでも、ふつつりとやめになりました。第一号の絵も、第二号の絵も、うまくゆかなかったので、ぼくは、がっかりしたのです。おとなの人たちときたら、じぶんたちだけでは、なに一つわからないのです。しじゅう、これはこうだと説明しなければならないようだと、子どもは、くたびれてしまうんですがね。

## 引用文献

- 1) 「保育所保育指針」厚生労働省, 2008, p89
- 2) 中山ももこ「絵を聴く保育」p.13～p.76, かもがわ出版, 2016
- 3) ローエンフェルド著, 勝見勝訳「子どもの絵」p.28～p.122, 白揚社, 1956
- 4) サン・タグジュペリ作, 内藤濯訳「星の王子さま」p.10～p.12, 岩波文庫, 1953

## 参考文献

- 1) 東山明・東山直美「子どもの絵は何を語るか」日本放送出版協会, 1999